

子どもはなぜ「学校の怪談」を語るのか — アンケート調査による抑圧説の検証 —

吉岡 一志

山口県立大学 共通教育機構

Why Do Children Tell “Gakkou no Kwaidan” ? — Verification of resisting pressure hypothesis from a questionnaire survey —

Kazushi YOSHIOKA

The General Education Division Yamaguchi Prefectural University

Abstract

The purpose of this thesis is to consider why children tell “Gakkou no Kwaidan” through a statistical verification of hypothesis that the cause of “Gakkou no Kwaidan” boom is resistance by children who are oppressed at school and home. In 2007, this survey was carried out at five public elementary schools and two public junior high schools in Tohoku, Kinki and Chugoku regions. For this analysis it was examined what variables determined children’s attitude toward ghost story by means of four independent variables: sex, educational phase, student subculture, and parent-child relationship. As a result of analysis, it didn’t support the conventional hypothesis that “Gakkou no Kwaidan” boom caused by children resisting pressure. It was proposed a new hypothesis that the source of occurring “Gakkou no Kwaidan” was will of children trying to acquire an identity of its own because there was correlation between attitude toward ghost story and variables associated with recognition and communication.

Key words: “Gakkou no Kwaidan”, subculture, children, oppression, communication, identity

1. 問題の所在

本稿の目的は、「学校の怪談」の流行の原因が学校や家庭による抑圧に子どもたちが抵抗したものであるという枠組みを統計的に検証し、なぜ「学校の怪談」が語られるかを検討することである。

「学校の怪談」は学校を舞台に密かに語られ伝承されてきただけでなく、1990年前後には各種メディアで注目されはじめ「学校の怪談」ブームが起こった。「学校の怪談」は児童文学やテレビアニメ、映画、マンガ、ゲームなどあらゆるメディアに題材として取り上げられたことからわかるように、子どもたちの間に広く浸透していった。そればかりでなく「学校の怪談」は1990年代の「Jホラー」ブームの火付け役となったとまで言われる（一柳 2005）。

「学校の怪談」ブームはただ子どもたちが好んで怖い話を求めるというだけのものではなく、抑圧された子ども像と結び付けられて語られることが多い。

一柳（2005）によれば、管理教育と個性尊重という矛盾をはらむ近代教育の闇が「学校の怪談」を生み出す土壌を作り上げたという。近藤（1997）や常光（2002）などによっても、こうした学校による子どもたちの抑圧と「学校の怪談」の流行を結び付けて議論されている。このことは1970年代末にわかに広まった「口裂け女」の事例にも当てはまる。

これまでも文学研究や民俗学の領域において妖怪譚は抑圧への抵抗という文脈で捉えられてきた。膨大な量の説話文学を分析し、鬼とは何かという課題に挑戦した馬場（1988）は、抑圧された人々による反体制、反秩序にその特質を見出した。妖怪譚の発生と抑圧という枠組みは、柳田（1989）や谷川（1984）にも見られ、いずれも虐げられた人々と妖怪譚の関係に注目している。

上述した「学校の怪談」の研究も、これら文学研究や民俗学の枠組みを踏襲していると考えられる。

「学校の怪談」ブームに先立ち、80年代には学校が子どもたちを抑圧しているという言説が流布していた（小谷 2003）。「学校の怪談」が子どもたちの抑圧と結び付けて語られたことは、このような社会状況から見て自然なことであろう。興味深いことに、「口裂け女」の流行時にも、「教育ママ」と呼ばれる子どもを抑圧する母親が問題視される語りが広まっており、母親に対する子どもの恐れが具現化されたものが「口裂け女」だとされた（宮田 1985）。このように「学校の怪談」ブームと同時期に、子どもが抑圧されているという言説が広く浸透していたのである。

そのため一柳（2005）や常光（2002）の議論は説得力を持ち受け入れられたが、必ずしもこれらの枠組みは十分に検証されていたとは言いがたい。さらに、これらの先行研究の問題点は「子ども」のイメージを恣意的に操作していたことである。「学校の怪談」の語り手としての子どものイメージは、多様に揺れ動き、小学生から成人にまで及ぶこともある。例えばサンプルの収集にあたっては、松谷（2003）や近藤（1997）にみられるように大学生など成人が調査対象者とされ、子どもの頃に語られたとされるものや現時点で大学生によって語られているものが、区別されることなく「子どもが語る『学校の怪談』」として一括りにされる傾向にある。しかし、誰がどのような抑圧を強いられ、誰が「学校の怪談」を語るのかという点を明確にしなければ、安易に「学校の怪談」ブームと抑圧を結び付けることはできないだろう。

そこで本研究では、小学生と中学生に対して行ったアンケート調査をもとに、子どもたちの抑圧と「学校の怪談」の関係を経験的に検証することを目的とする。このことにより、なぜ「学校の怪談」が語られるのかを考察する。

2. 調査の概要

調査は質問紙によるもので2007年6月から7月にかけて、東北地方・近畿地方・中国地方の5校の公立小学校、2校の公立中学校の協力を得て実施され

た。調査対象者の概要は表1のとおりである。調査は小学4年生から中学2年生を対象に行ったが、小学4年生については調査協力を得られたのは1校だけであり、サンプル数が極端に小さいため分析から除外した。また、中学生のサンプルが4割弱となっており、若干の偏りがみられる。しかしながら、小学生と中学生を分けて分析を行うため、分析結果に大きな支障はないと考える。

3. 分析枠組み

本研究では「学校の怪談」の流行を子どもたちの抑圧への抵抗とする言説を検証することを目的とする。そこで、妖怪譚を好む子どもたちの態度を「学校の怪談」の流行の源泉と捉え、「お化けや幽霊が登場する物語」を読んだり、聞いたりすることを好むかを問う質問項目を用いる。「学校の怪談」ではなく「お化けや幽霊が登場する物語」という表現を用いたのは次のような理由による。子どもたちは「学校の怪談」という認識のもと妖怪譚を語るのではなく、学校を舞台として子どもたちが語る妖怪譚が「学校の怪談」として研究者により発見されたに過ぎない。そのため「お化けや幽霊が登場する物語」とした方が、より子どもたちの語りの実態に即した回答が得られると考えられるからである。

以上の従属変数を説明する独立変数として、性別、学校種別、生徒文化、親子関係を用いる。これらの変数は、いずれも抑圧される者を示すものである。性別については、鈴木・林・野村（2007）や馬場（1988）などが指摘するように、女性は虐げられる存在として妖怪譚の題材にされる傾向にある。だとするならば、男子よりも女子の方が妖怪譚を好むと考えられる。生徒文化では、反学校文化を内面化した子どもが妖怪譚を好む傾向にあると考えられ、その傾向は学校種別で言えば中学生に顕著に表れることが推測できる。最後に親子関係については、「教育ママ」という表現に象徴されるように、しつけに対して厳しい親の態度が子どもを抑圧するものと考えられ、とくに子どもの学業成績に強い関心を持つ親の態度が妖怪譚への志向を規定するという仮説が立てられ

表1 調査対象者の概要

学年	5年生	6年生	中1	中2	計
	31.4	31.0	19.3	18.3	
学校別	T小学校	M小学校	C小学校	S小学校	100 (1292)
	10.0	19.6	15.2	8.3	
	D小学校	D中学校	K中学校	計	
	9.4	18.7	18.8	100 (1292)	
性別	男子	女子	計		100 (1291)
	52.1	47.9			

※数値は%を、()内は度数を示す。以下同様。

表2 妖怪譚及び読書に対する志向

	とても好き	少し好き	ふつう	あまり好きではない	まったく好きではない	合計
妖怪譚	33.0	21.4	26.8	11.5	7.2	100.0 (1283)
読書	29.4	27.1	28.5	10.7	4.4	100.0 (1284)

表3 妖怪譚への志向と性別・学校種別との関連

	男子	女子	
妖怪譚	72.8%	75.8%	
読書	69.2%	88.0%	***
	小学生	中学生	
妖怪譚	76.6%	70.4%	*
読書	79.1%	78.8%	

(*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$) 以下同様。

る。

以上のように、本稿では妖怪譚への志向が子どもの抑圧を示すと考えられる4つの独立変数に規定されるかを確認することで、「学校の怪談」の流行が子どもたちの抑圧で説明できるか検証を行う。その際、妖怪譚の特徴を鮮明にするため、読書への志向と比較しながら検討する。

4. 分析結果

本調査では、妖怪譚を好むのは誰かという視点で分析を進めていく。まず従属変数として用いる読書と妖怪譚を好む子どもの割合を確認しよう。表2は「お化けや幽霊が登場するような物語を読んだり、聞いたりするのは好きですか?」「あなたは読書をするのがどれくらい好きですか?」という質問項目を設定し、「とても好き」から「まったく好きではない」の5件法で回答を求めたものである。読書と妖怪譚をそれぞれ好むとしたもの(「とても好き」と「少し好き」を合わせたもの)は、読書については56.5%、妖怪譚については54.4%であった。中学生のサンプルが少ないことに留意する必要があるが、両者は大きな差はなく、いずれも子どもたちにとっては楽しみとなっていると言えよう。妖怪譚は恐怖をあおる描写が少なくないが、子どもにとって敬遠されるものではないことがわかる。

以降の分析では、これらを従属変数として、いくつかの観点から語り手の属性を明らかにしていく。ただし、妖怪譚を志向する子どもたちの特徴を明確にするため、「ふつう」への回答を除外して分析する。読書への志向についても同様の処理を行う。

(1) 性別・学校種別との関係

表3は、妖怪譚と読書の志向について性別、学校種別の関連を見たものである。クロス集計にあつ

ては、「とても好き」「少し好き」を「好き」、「あまり好きではない」「まったく好きではない」を「好きではない」に統合し分析を行った。表中の値は、妖怪譚、読書について「好き」と回答したもののみを示している。性別との関連については、読書を好むものが女子に多いが、妖怪譚を好むものは男女で有意な差が見られなかった⁽¹⁾。また、学校種別では、妖怪譚の嗜好に有意な差があり、小学生の方が妖怪譚を好む傾向にあることがわかる。読書については学校種別に差が見られなかった。

宮田(1985)は、女性が幽霊として描かれる民間伝承が多いことに注目し、妖怪譚と女性、とくに若く弱い立場に置かれる下女との関連を指摘している。また、鈴木・林・野村(2007)も同様に、なぜ女性ばかりが怪談の題材にされるのかという観点から、制度に対する女性の抵抗を妖怪譚から読み解く試みを行っている。しかしながら、妖怪譚の受容者に焦点をあてた本稿の分析では、性別による違いは見られなかった。このことは、妖怪譚と女性の幽霊との関連を物語の中だけで分析するのではなく、受容者が置かれる状況とも合わせて議論する必要性を示していると言えよう。さらには、女性、とくに小中学生の女子が虐げられた存在であるかどうかについても慎重に検討される必要がある。

学校種別については、先行研究が指摘するように、抑圧への抵抗が妖怪譚の源泉であるならば、より明確に反学校的価値観を形成する中学生の方が妖怪譚を求めると考えられる。しかし、妖怪譚への関心は中学生の方が低いという結果が見られた。妖怪譚への志向は抑圧への抵抗という枠組みではなく、現実に対する認識とのかかわりの中で議論すべき問題なのかもしれない。現実認識との関連については本調査で検証することはできないが、次節では、抑圧への抵抗という枠組みについて学校と家庭の二つの側面から詳細に検討してみたい。

(2) 生徒文化との関係

それでは次に、生徒文化との関係を見てみよう。表4は生徒文化と妖怪譚及び読書との相関係数を学校種別ごとに示したものである。生徒文化は生徒集団に特有の価値規範や行動様式を言うが、主に向学校文化と反学校文化に分化する(柴野・菊池・竹内1995)。「学校の怪談」が学校の抑圧に対する抵抗であるならば生徒の反学校文化と妖怪譚への志向が高

表4 妖怪譚への志向と生徒文化の相関

	小学生		中学生	
	妖怪譚	読書	妖怪譚	読書
学校の決まりはいつも守っている	-.037	.250 ***	.033	.249 ***
係りの仕事は一生懸命する	.026	.326 ***	.088	.322 ***
勉強は楽しい	.056	.416 ***	-.009	.341 ***
予習や復習をよくしている	.058	.322 ***	.063	.232 ***
授業は熱心に受けている	-.014	.310 ***	.047	.257 ***
学校の先生を尊敬している	.046	.287 ***	.081	.210 ***
先生と気軽に話すことができる	.056	.160 ***	.068	.014
学校に行くのがいやになる	-.028	-.148 ***	.091	.074
友だちといつも一緒にいたい	.112 **	.055	.029	.019
あまり友だちと話をしない	-.115 **	.029	-.054	.170 **

い相関を示すと考えられる。

表を見ると、小中学生の読書への志向はいずれも「学校の決まりはいつも守っている」など向学校文化の特徴を示す項目と正の相関がみられた。小学生においては、読書への志向と「学校に行くのがいやになる」の項目に負の関連がみられ、中学生においては「あまり友だちと話をしない」の項目に正の相関がみられた。このことから、学校種にかかわらず生徒の向学校文化が読書への志向を支えており、中学生では読書への志向は、友人たちとのコミュニケーションを重視しない孤独な子ども像と結びついていると言えよう。

妖怪譚への志向については、ほとんどの項目で有意な関連が見られなかった。唯一、小学生においてのみ、「友だちと一緒にいたい」に正の相関、「あまり友だちと話をしない」に負の相関がみられたに過ぎない。これらの項目は友人との人間関係を示すものであり、友人との関係を重視しようとする子どもほど妖怪譚を志向していることがわかる。このことは中学生の読書への志向が友人とのコミュニケーションを遠ざけていたことと正反対の結果である。

向学校文化と妖怪譚への志向が学校種別によらず相関がみられなかったことから、抑圧への抵抗という枠組みで「学校の怪談」の流行を説明することは適切とは言えない。ただし、小学生においては友人関係を重視する生徒文化が妖怪譚への志向と相関関係にあることから、学校的価値観から距離を置いたところで妖怪譚が語られているとみることもできる。つまり、反学校的態度とまでは言えないが、勉強や教師との関係に馴染めない子どもたちの文化として、妖怪譚は学校の中で位置づけられているのかもしれない。

「口裂け女」の流行についてコミュニケーションの側面に注目した木下(1994)は、「学校の怪談」を「見たし怖し」の心理構造に支えられた「消費的

コミュニケーション」であるという。すなわち、小学生にとっての妖怪譚は人間関係をつなぐコミュニケーションツールとなっていると考えられる。この点に読書への志向とは異なる特徴があると言えよう。また、中学生で友人関係の項目が有意な差として現れなかったのは、成長とともに妖怪譚にリアリティを感じるができなくなり、妖怪譚とは別のコミュニケーションツールが代替するようになったからではないだろうか。

(3) 親子関係との関係

次に、親子関係との関連を見てみよう。抑圧への抵抗と妖怪譚の流通との関連は、親子関係についても先行研究で指摘されている。近藤(1997)は、1970年代後半の口裂け女の騒動を子どもによる「保護者である親たち、とくに『教育ママ』たちへの反乱」(1997 p.109)だと捉えている。学力至上主義が学校だけでなく家庭にも浸透し、子どもたちは母親に勉強するよう責め立てられた結果、母親に対する潜在的な恐れが口裂け女に投影されたというわけである(宮田 1985)。そうであるならば学業重視の親の態度が子どもの妖怪譚への志向を規定すると考えることができる。そこで、学校種別に親との関係と妖怪譚及び読書との相関係数を表5に示した。

まず、読書への志向についてみると、小学生では「努力することが大切だと言われる」「夕食は家族そろって食べる」など多様な項目で有意な正の相関があるが、中学生では多様性がなくなり、「話を真剣に聞いてくれる」など有意な関連がみられる項目は4つだけになっている。「読書ばかりしていると注意される」という項目は、とくに高い相関を示している。親子の関係においては話を聞くことやほめることなど子どもを承認するような関係性が読書への志向を高めている。またテストの点数への関心など、学業に関心を寄せる保護者の態度も読書へ

表5 妖怪譚への志向と親子関係との相関

	小学生		中学生	
	妖怪譚	読書	妖怪譚	読書
人には親切にしろと言われる	.096 *	.118 **	.024	.060
ウソをついてはいけないと言われる	.078	.107 *	.066	.083
言葉使いや礼儀を注意される	.128 **	.016	.109 *	.103
努力することが大切だと言われる	.040	.174 ***	.040	.028
話を真剣に聞いてくれる	.113 **	.176 ***	-.003	.168 **
よいことをしたときほめられる	.101 *	.178 ***	.073	.163 **
勉強しろと言われる	.097 *	-.076	.038	.018
本を読みなさいと言われる	.084 *	-.117 **	.045	-.072
テストの点を聞かれる	.060	.039	.047	.155 **
マンガばかり読んでしていると注意される	.112 **	.035	.031	.096
読書ばかりしていると注意される	.020	.106 *	.007	.300 ***
夕食は家族そろって食べる	.031	.173 ***	-.101	.049

の志向を促進させていることがわかる。これらのことから、読書への志向については、保護者による承認や学業への配慮が規定要因となっていると考えられ、表4に照らし合わせて考えると、向学校文化と親和性の高い価値観を家庭で形成された子ども像が浮かび上がる。

一方、妖怪譚への志向については、中学生では「言葉使いや礼儀を注意される」のみに有意な関連がみられるだけで、他の項目との関連はない。小学生を見ると、中学生と同様に「言葉使いや礼儀を注意される」に有意な相関がみられるほか、「マンガばかり読んでしていると注意される」「勉強しろと言われる」など学業にかかわる項目に相関がみられる。また読書と同じように「話を真剣に聞いてくれる」「よいことをしたときほめられる」など子どもの承認にかかわる項目でも有意な相関があった。

「マンガばかり読んでしていると注意される」「勉強しろと言われる」は小学生の妖怪譚への志向を特徴づける項目である。このことは先行研究が指摘するような学力至上主義といった保護者からの圧力が妖怪譚への志向を規定していると考えられる。しかしながら、こうした家庭における抑圧は、中学生になるとその影響力を失くしてしまう。その一方で、妖怪譚への志向を規定する項目のもう一つの特徴である「言葉使いや礼儀を注意される」は中学生においても有意な関連を示している。この項目は、上下関係という非対称な人間関係を重視する親の態度である。こうした価値観を内面化した子どもたちは、非対称な関係下にある他者に対してもコミュニケーションをうまくはかろうとし、妖怪譚をコミュニケーションツールとして利用しているのかもしれない。

5. まとめ

以上、本稿では「学校の怪談」の流行を子どもたちが抑圧されているという枠組みで捉えることを、妖怪譚を志向する子どもたちの属性との関係を明らかにすることで検証してきた。本調査によって明らかになったことを整理すると以下の3点にまとめられる。

第一に、子どもの妖怪譚への志向は、男女に差が見られなかったが、学校種別では中学生よりも小学生の方が有意に高い値が示されたことである。女性が抑圧された存在であるとする前提には慎重な議論を要するが、先行研究で指摘されるような女性と妖怪譚との関係性は見られなかった。また、反学校文化が顕著にみられるであろう中学生より小学生の方が妖怪譚を志向する傾向にあったことは、学校からの抑圧が「学校の怪談」を生み出すというこれまでの仮説を支持しない結果であると言える。

第二に、妖怪譚への志向は、反学校的な生徒文化とは明確な関連が見られず、小学生においてのみ、友人とのコミュニケーションにかかわる態度と間に正の相関が確認されたことである。第一の結果とも合わせて、反学校的な子どもたちの態度が妖怪譚の流行を支えているわけではないことが明らかになった。ただし、小学生においては、友人との関係を重視する生徒文化が妖怪譚の志向と正の相関にあることから、コミュニケーションツールとして妖怪譚が志向されている様子が示唆された。

第三に、親子の関係性と妖怪譚への志向の関係を見ると、小学生では学業を重視する親の態度と正の相関があるが、中学生ではこれらの相関関係は失われ、非対称な人間関係の維持にかかわる項目にのみ正の相関が示されたことである。中学生になると妖怪譚への志向に対して家庭の影響力はほとんどなく

なるが、小学生では学業を重視する親の態度が特徴的な規定要因としてみられる。さらに、言葉使いや礼儀など非対称な人間関係の調和を重視する態度が、妖怪譚の志向と正の相関があることから、ここでも妖怪譚のコミュニケーションツールとしての側面をうかがい知ることができる。

では、以上の結果をもとに先行研究が指摘してきた「学校の怪談」の流行と子どもたちの抑圧との関係について検討するとともに、なぜ「学校の怪談」が語られるかについて考察してみよう。常光 (2002) や一柳 (2005) は「学校の怪談」と学校による抑圧への抵抗との関連を指摘し、近藤 (1997) や宮田 (1985) は家庭での抑圧に注目した。しかしながら、生徒文化との関連から見る限り、小学生、中学生ともに反学校文化の価値観を持つ子どもの態度は妖怪譚への志向に影響を及ぼしていない。親の教育態度については、小学生で学業を重視する親の態度が妖怪譚への志向を規定していることから、近藤 (1997) の言う「学力至上主義」による「人間性の蹂躪」への抵抗が妖怪譚の流行につながったという仮説は小学生については支持されるように見える。しかし、生徒文化において学業との関連がみられないことから、小学生における学業との関連は表面的な関連に過ぎないものなのではないかと考えることができる。

ここで注目したいのは、コミュニケーションツールとしての妖怪譚という位置づけである。生徒文化においても、家庭での親子関係においても小学生の妖怪譚への志向は、コミュニケーションのありようと深いかかわりにあった。一方で家庭において学業を重視する親の態度が妖怪譚への志向と相関関係にあったことに対し、生徒文化では学業との関連はない。このことは、小学生におけるアイデンティティの形成に妖怪譚への志向が大きくかかわっていることを示しているのではないだろうか。

Bauman (2000) によれば、個人が流動化する現代社会では、アイデンティティは与えられるものから獲得するものへと変容したという。こうした変化は、上野 (2005) が指摘するように「アイデンティティ脅迫」という状況をもたらした。アイデンティティの獲得を脅迫された子どもたちは他者からの承認を得るために他者とのつながりやコミュニケーションを求めようになると考えられる。

以上の社会的背景を本調査結果に照らして考えれば、家庭では学業による親からの承認が子どものアイデンティティを支えていると言える。しかしながら、学校では、勉強が苦手であっても、教員と好ましい関係を取り結ぶなくても友人関係のなかで承認を得ることができよう。つまり、妖怪譚への志向はアイデンティティを獲得しようとする子どもたちの姿勢によってもたらされているのではないだろう

か。妖怪譚を語り合う中で、子どもたちは他者とのコミュニケーションを求め、アイデンティティを獲得しようとしているのである。ただし、妖怪譚は子どもの成長とともにリアリティを失い、アイデンティティの形成に寄与するツールとしての役割を担えなくなっていくと考えられよう。以上のことから、「学校の怪談」は小学生において脆弱なアイデンティティを補完するため、他者からの承認を得ようとする手段として語られていたと言えるのではないだろうか。

本稿は、「学校の怪談」の流行を抑圧された子どもたちの抵抗という枠組みで捉える先行研究の知見を、統計的手法を用いて検証してきた。分析の結果、「学校の怪談」の流通をアイデンティティの形成とのかかわりの中で議論する視点を提供することができた。今後の課題として、小学生がリアリティを持って「学校の怪談」を受入れるメカニズムを明らかにする必要がある。

註

- (1) データを小学生と中学生に分けて、性別と妖怪譚への志向の分析を行っても有意な差は見られなかった。

〈参考文献〉

- 馬場あき子1988『鬼の研究』筑摩書房。
 一柳廣孝2005『「学校の怪談」はささやく』青弓社。
 木下富雄1994「現代の噂から口頭伝承の発生のメカニズムを探る—「マクドナルド・ハンバーガー」と「口裂け女」の噂」木下富雄他編『記号と情報の行動科学』福村出版、pp.45-97。
 近藤雅樹1997『靈感少女論』河出書房新社。
 小谷敏2003『子ども論を読む』世界思想社。
 松谷みよ子2003『現代民話考〈7〉学校・笑いと怪談・学童疎開』筑摩書房。
 宮田登1985『妖怪の民俗学』岩波書店。
 鈴木紀子・林久美子・野村幸一郎2007『女の怪異学』晃洋書房。
 柴野昌山・菊池城司・竹内洋 1995『教育社会学』有斐閣。
 谷川健一1984『魔の系譜』講談社。
 常光徹2002『学校の怪談—口承文芸の研究 I』角川書店。
 上野千鶴子, 2005『脱アイデンティティ』勁草書房。
 柳田國男1989「妖怪談義」『柳田國男全集 6』筑摩書房 pp.7-212。
 Zygmunt, Bauman, 2000, Liquid Modernity, Polity Press, (ジグムント・バウマン, 森田典正訳 2001『リキッド・モダニティー—液状化する社会』大月書店)。